第一部　一一〇年の歩み

第一章　創立の頃

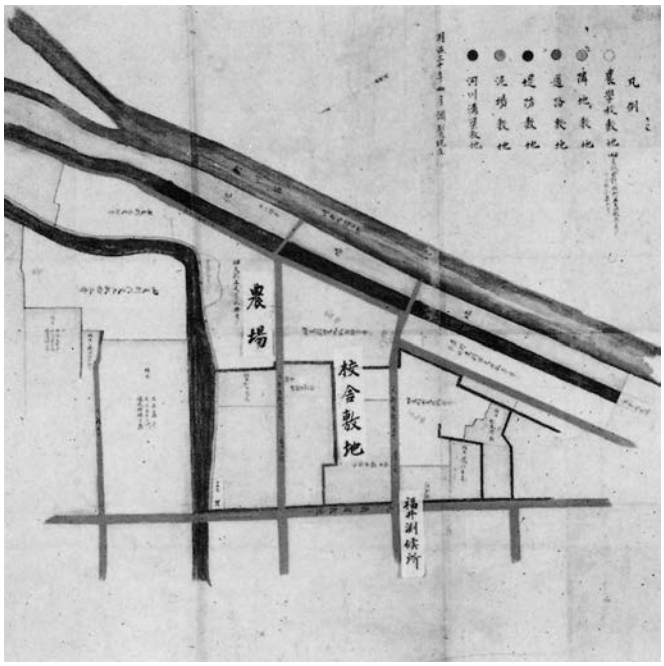
一八九四（明治二七）年四月～一八九五（明治二八）年三月

福井農林高等学校の歴史は、明治二八年開校の簡易農学校を初めとするが、その前身は明治二六年県議会において再設立が決議され、翌二七年再開された農事講習所におくことができる。

福井県農事講習所は明治一六年七月に足羽郡明里村（現福井市）に開設されたが、農業教育の学校制度化は機が熟していなかったのか、明治一七年七月に廃止された。

しかし、明治二七年の日清戦争を契機とした全国的な産業界の発展に伴い、農業教育の重要性が叫ばれ、明治二七年四月に農事講習所が再発足されることになった。生徒修業年限は二年、校舎敷地は福井市日之出中町（現日ノ出三、四丁目）で、校舎は九月落成、七月生徒二一名を募集して、一〇月一日に開校した。

本校に保存されている「借上地図」は明治三〇年四月、簡易農学校時代に作製されたものであるが、講習所が開設半年で簡易農学校に引き継がれたことを考えると、農事講習所当時の状況を受け継いでいると考えられる。



明治30年調整借上地図

第二章　福井県簡易農学校時代

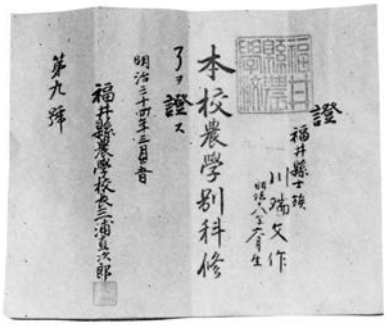
一八九五（明治二八）年四月～一八九九（明治三二）年三月

明治二八年になると、農事講習所は、発達めざましい農業技術を農家子弟に教え、生産力向上をはかりたいという時代の要請に基づき、簡易農学校に改変された。開校以来わずか六ヶ月であった。

簡易農学校は、農科は本校に、水産科は分校として遠敷郡竹原村に設置された。本校は明治二八年四月一日に、分校は半年遅れて九月に開校した。この水産科は現在の小浜水産高等学校の前身である。簡易農学校の修業年限は三年の甲種と二年の乙種に分かれており、福井県簡易農学校は乙種であった。生徒定員は各科一〇〇名以上で、入学資格は満一四歳以上の男子で卒業後既修の業に従事する志ある者、体格強壮にして労力に絶えうる者で尋常小学校卒業以上の学力ある者と規則に示されている。入学に当たっては、入学願書や履歴書の他、市町村長の証明を受けた自己もしくは父兄の所有地調書を必要とした。郡市長はそれに意見を付し、本校に回付して入学が決定された。

また、農閑期等に一定の期日を定め県内各地に「別科教場」という分教場を開設し、巡回教授の方法で農業教育を普及した。足羽・吉田および福井市は本校内に夏季・冬季の休暇を利用して開設した。修業年限は二年、毎年約三〇日の開講であった。教育内容は土壌、肥料、作物、養育、農業経済などで、明治三〇年からは養蚕も加えられた。なお簡易農学校の期間は明治三二年三月までの四カ年であった。

明治31年簡易農学校第３回卒業証書



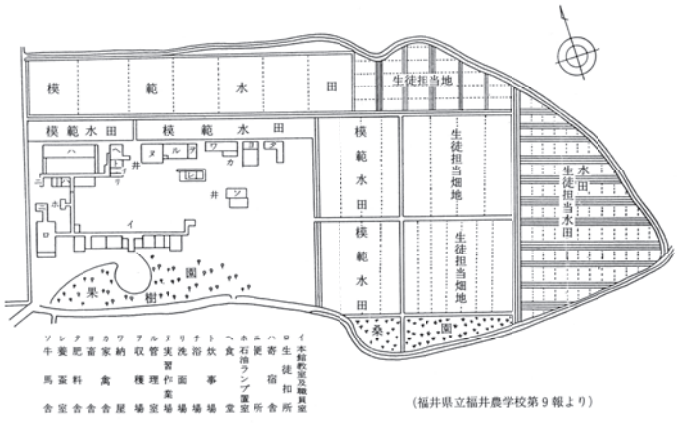
明治30年～32年

学籍簿

第三章　福井県立福井農学校時代

一八九九（明治三二）年四月～一九〇八（明治四一）年三月

明治三一年一一月県会で、簡易農学校を修業三年の甲種農学校に昇格させ、遠敷郡竹原の分校（水産科）は乙種のまま簡易水産学校として独立させることを決議し、三二年四月一日に「福井県農学校」と改称した。これにより、中学校の学科と同程度以上と認められることになった。この後、明治三四年六月、県下の中等学校は県立と改称されたので、本校は福井県立福井農学校と改められた。校長には米穀硬度計の考案者として著名な三浦直次郎氏が着任した。生徒は新たに一年級生、二年級生を募集し、元簡易農学校生については入学試験施行の上、入学を許可された。入学許可者の中で元簡易農学校二年級優等生および卒業生を以て第二年級を組織した。修業年限は三年で、定員は一〇〇名であった。



農学校諸建物配置及農場略図

施設の拡充とともに本校舎が狭隘となり、寄宿舎を教場に当て、宝永上町の大谷派教校を借り受けて寄宿舎とした。また簡易農学校時代に創設された別科教場は続けられ、農業教育普及に努力をした。

校舎は建坪二〇五坪二合六勺（六七七㎡）で、寄宿舎は附属物とも一二四坪（四〇九㎡）、校地は六〇町七畝一七歩（一八、〇〇〇、二二七㎡）、実習地反別は、田一町一反一畝二八歩（一一、〇八一㎡）、畑一町二反七畝一七歩（一二、六二九㎡）、計二町三反九畝一五歩（二三、七一〇㎡）であった。場所は福井市日之出下町にあり、隣接の元海軍大将岡田啓介氏宅の一部を借り受けて校長室・職員室・小使室に当てた。しかし、狭隘であり、また土地が全般的に低いため、水害に見舞われることが多かった。明治三二年に県下一円を襲った水害では校舎の二階にまで浸水するという大被害を被ったため、校舎移転の運動が大きくなった。その結果明治三五年吉田郡円山西村町屋（現福井市）に移築することになった。ここは当時山犬の出るような淋しいところであったが、適地として同年移築が終了した。

第四章　福井県立福井農林学校時代

一九〇八（明治四一）年四月～一九四八（昭和二三）年三月

福井県立福井農林学校時代は、明治四一年四月の校名改称から終戦後の学制改革までの四〇年間である。

明治四一年四月に校名が改称されるとともに、修業年限の延長、組織の変更などが行われた。翌四二年四月には蚕業別科を新設し、同年九月には皇太子殿下の北陸巡行の折、本校に行啓を賜った。その他校旗、校章の制定、同窓会組織として農友会が発足した。また、在学中の者で組織する校友会も盛んに活動した。さらに大正期に入って学校演習林の設置、校歌の制定等があり、学校として充実した時代を迎えた。

その間、第一次世界大戦（大正三年）が起こり、戦禍を免れた我が国の産業は著しい発展を遂げ、国民の生活水準も高まり、進学率も上昇し大正デモクラシーなどの民主主義運動が高揚した。しかし、一方では大正七年の米騒動をはじめとする経済恐慌などの社会問題もおこり、教育制度の上にも大きな影響を与えた。農業教育の面では産米増産、国体観念涵養等を中心に農業学校の新設拡充、中等農業教育の充実が図られた。

本県でも、今立農学校（大正四年）、坂井農学校（同六年）を開校し、本校では大正六年、一四年に学則の一部改正を行った。また、一三年には折しも農村不況という状況下ではあったが、本校のいっそうの発展を期して創立三〇周年記念式典を挙行した。

その後、昭和六年には満州事変が起こり、日華事変、二・二六事件と軍国主義が次第に高まる中で、昭和八年陸軍特別大演習が福井地方で行われ、本校はその際に御用野菜の栽培の奉仕をした。翌九年一一月には創立四〇周年記念式典を盛大に挙行した。

次いで昭和一一年には、二八年間県下の養蚕専門の教育を担ってきた蚕業専修科が閉鎖され、一三年には福井県立青年学校教育養成所が併設された。一五年には創立以来二回目の校地校舎移転が行われて、新保町時代を迎えた。そして、一六年の太平洋戦争突入とともに農業教育も戦時体制に組織化され、学徒動員、援農部隊の北海道派遣などを行ったが、敗戦を迎え、戦後の学制改革となった。

農林学校時代の校旗、校章

第一節　前　期

一　校名改称とその実状

明治四〇年三月の小学校令の改正により義務教育が六年に延長されたが、それに続いて本県では、中学校入学規則が改正された。本校では林産業振興の必要から、林学の専門教育を行う林科を新設し、一部を農科、二部を林科として生徒募集を行った。また修業年限も待望の四年に延長され、定員も二五〇名となり、名実ともに充実することになった。明治四一年三月一六日、校名も福井県立福井農林学校と改称された。

この頃は全国でも四年生の農学校は新潟県加茂農林学校だけであった。その後も当時の出田校長は設備の充実、教員給の増加優遇、職員生徒の意気の鼓舞に専念し、本校は全国においても有名校として名をなすようになった。この時期が基礎となり、以来本校は福井県における農業教育の核として発展し、戦後の教育改正時まで多くの成果を上げることが出来たのである。

二　皇太子殿下行啓

明治四二年の秋、皇太子殿下は北陸路を御巡行、福井にお立寄りの際、本校にも行啓された。

本校では夏休み明け後の一ヶ月、実習など振り替えをして校舎内外を清掃し、農場も整備して、行啓を待った。奏任官待遇の教師はそろってシルクハットを新調した。

九月二〇日、御座所は本館二階の東側一年の教室に設けられた。殿下は石沢教諭の土壌学、阿南教諭の養蚕の授業風景や農場の生産品、生徒の成績品、および製作品、更には実習風景を親しくご覧になられた。特に野外実習では馬耕・打起・水田除草、挿木等を行ったが、当日は折あしく雨のため階上から台覧された。

三　蚕業別科の新設とその後

明治四二年四月蚕業別科が新設された。修業年限六ヶ月、定員は三〇名であった。この時期は県内においては小浜水産学校に水産補習学校、又女学校には技芸専修の補習科を設けるなど種々の面にわたり教育施設が附設された。これは明治末年から大正の初めにかけて、日本の経済が行き詰まりを示したためで、日露戦争後における国力回復の一策として奨励された。従って蚕業科も農業経営合理化の一環として、その必要性を生じ、農村生活の厚生のため新設されたのである。そして大正元年六月蚕業別科細則を改正して修業年限を一ヵ年に延長した。大正四年三月には本校敷地内に福井原蚕種製造所が設置され、大正七年まで同所に置かれたが、その後他に移された。これが現在の蚕業試験場の前身である。大正一二年三月には文部省規定に準じ蚕業専修科と改称した。それは第一次世界大戦の影響で県の輸出羽二重等の活況があったからである。昭和二年には更に修業年限を一年六ヶ月に延長した。しかし、昭和初期には世界不況、特に米国の不況の影響を受けて輸出は振るわなくなり、昭和一一年三月の学則改正で蚕業専修科は九月で閉鎖された。その後、本科の中の農蚕科として戦後の改正まで続いた。

四　校旗、帽章、校歌の制定

校旗は出田校長時代に校旗制定の議が起こり、養蚕実習より得た繭で糸を製し、これを原料として京都に注文し制作した。特に制定の年は明らかでないが、明治四二年の皇太子殿下行啓記念写真の右端に農学校時代の校旗がまだ見えるところから、少なくともその後一、二年の間と推測される。校旗制定式を挙行し、その後県の認可を願い出たところ、時の学務課長はこんな立派な校旗は師範学校にも中学にもなく、質素を尊ぶ農学校の校旗にはぜいたくだとなかなか認可がおりなかったそうである。

帽章は、発足当時はまだ農学校時代の帽章が採用されていて、二筋の青線に「農」と図案化した字を附したものであった。青筋二本は農科、林科を表したものでないかと推定されている。その後明治四三年頃に農学校時代の校章「農」の字を囲むように林の字を配置し、農林という赤銅の紋章を考案して、青筋入りを廃した制帽を制定した。

校歌

南足羽の山そゝり　北九頭竜の川走る
広き沃野のその中に　立つるは福井農林校
瑞穂の国のうまし国　亟なる汗を拭ひつゝ
秋のみのりを祈るなる　我等の天職ここにあり
森の緑の繁るべき　業をばひたすら学びつゝ
山の幸をば祈るなる　我等の天職ここにあり
銃剣とるも国のため　鋤鍬とるも君のため
尽す心に二つなし　勇め励めよ諸共に

校歌は、敗戦後学制改革が行われるまで歌い続けられた。大正五年に国漢の渡部昇先生（四国宇和島市出身）の原詞によるものを、当時の四年生代表吉野平君の名義で本県出身の芳賀矢一博士が校正されたものである。一時「アムールの流血や」という歌の曲を利用して歌っていたが、昭和六年四月陸軍戸山学校に作曲を依頼して制定された。

この作詞者については長らく懸賞募集によって選ばれた当時の学生佐藤正雄君のものであるとされていたが、当時学生であった土屋豊孝君（一六回卒）の指摘により「九〇年史」発行の折訂正された。

五　農友会・校友会

本校卒業生は、明治三七年頃には農事改良を図る目的で各郡で農業同窓会を組織した。別科修了生もこれに入会し、また郡内の農事に熱心なものも会員とし、農談会や果実、蔬菜品評会、種子交換会の開設などの活動をした。農事改良に効果があるとして、郡によっては同窓会に郡費を補助するところもあった。その後、明治四〇年から発足した巡回農事講習会の開催で、各地の同窓生との連絡も密になり、同窓会の組織は新しく「農友会」として発足することになった。

農友会の組織は会長は校長であり、副会長二名のうち一名は卒業生、

一名は学校職員の中から選出した。

明治四三年の学事状況報告書（明治四三年県統計書）によると「農友会は職員、生徒及び卒業生を以て組織し文学部、体育部に分つ。その文学部の事業には毎月一回弁舌会を開き、且つ図書館を設けて毎月若干の図書雑誌等を購入し随時閲覧せしむ」という記事があり、農友会は生徒訓育の補助機関でもあった。

一方、学校在学中の者をもって組織するものに校友会があった。大正三年の「農友会報」によると、体育部は庭球が盛んで、野球は運動場が狭く充分な活動が出来ないのを遺憾としている。その後野球部（軟式）は大正六年頃創設、長距離、相撲、柔道、剣道などがあった。鼓笛隊は昭和四年に創設、その頃は県下どの学校にもなく、最先端をゆくものであった。

農友会は大正期に入って「福井県農友会誌」「農友会名簿」等を発刊し、昭和七年には農友会直営の温室部を設けて運営するなど、活発な活動がみられた。

六　平泉寺地籍演習林設置経過

福井県立福井農林学校と改称され、林業科が増設された当時、まだ本校には学校演習林はなく、林業の実習は県の東郷模範林、剣岳模範林、永平寺の山林、足羽山公園等で行われていた。殊に東郷模範林へは年に何回か行き、番小屋に泊まって実習が行われた。

また足羽山公園には明治四三年五月頃、今村教諭を中心に林科生二〇余名が学校から赤松、黒松の三年生苗四〇〇本を持って行って植樹した。これは明治四二年の皇太子殿下（大正天皇）御巡幸の折、足羽山が記念公園として段々の台地に造成整備されたが、本校も行啓の記念として植樹したものである。現在の継体天皇像下の松林はその時のものと言われている。

林業科増設に伴い生徒の実験実習のための演習林が必要となり、大正二年には、大野郡荒土村、南条郡杣山村等三山の候補地をあげ踏査・視察している。その結果、平泉寺村小矢谷の山林一一四町歩余を最も適当として、大正三年三月、県参事会の決議を経て、三月二三日本県知事と平泉寺村長との間に地上権を設定した。同時に演習林寄宿舎も設置された。しかし、昭和二一年四月不慮の火災に遭い、全面積一三一町歩の中、四〇町歩が焼失したことは、遺憾の極みであった。

七　学校制度および学則の改正

大正四年、第一次大戦の勃発により、交戦諸国から軍需品の注文を受け、日本の商工業は発達を見た。この時農業界においても、経営合理化を計るため、大正六年に農業倉庫法が公布された。県農会はモデル農家を作って成果を検討したり、あるいは補助金を交付したりして共同経営の調査を行った。県においても生産経営技術指導のため、町村の農業技術員を大いに奨励し、大正五年からは補助金を出した。

本校もその政策をうけて、大正六年四月生徒定員を本科三〇〇名、別科五〇名とし、学則の一部を改正した。

その後、大正一二年三月郡立農学校等が県移管となり、それに伴い本校学則を改正し、学科課程の変更のほか生徒定員本科三〇〇名を三五〇名、別科五〇名に増加した。又大正一四年には学則中、生徒定員三五〇名を五〇〇名に、又四学年制を尋常小卒入学の五学年制に改め、学科課程を改正した。

制度組織の変更に伴い、学校施設の拡充が必要となり大正七年八月

には講堂を移築完成させ生徒溜所兼演武場として使用することとなった。新築された講堂は旧福井県会議事堂であり、福井中学に払い下げられていたものを移築したものである。その後新保地区に移転したときも移されて武道場として使用し、福井震災後更に改築されて講堂兼控所となった。その後昭和三四年三国高校川西分校に移築された。大正八年四月には教室四棟・寄宿舎一棟の増築、食堂・炊事場・浴室・農林産製造室・鶏舎を新築、旧実習作業場の移転竣工、温室の新築が行われるなど各施設の相つぐ建築と内容の充実が図られた。

八　創立三〇周年記念式典

大正一三年になると卒業生も一、〇七〇余名を数え、初めての創立記念式典が同年一一月一六日挙行された。

記念式典は、時の豊田知事、松平侯爵をはじめ来賓六〇余名、卒業生三〇〇余名の参加を得て、本校講堂で盛大に挙行された。

式典は学校長の式辞に次いで、豊田知事、その他の来賓の方々の祝辞があり、また各方面からの祝電も披露された。続いて本校教育に尽力された福岡八郎、谷口譲、松原朔朗、宇貝尹蔵、大光寺毅夫、菊地彦治、出田新、浅野駒吉、坂井五郎吉の各教諭に対し、表彰と銀杯一組が贈られた。ついで物故者追弔会が行われ、記念事業の一つとして奉安庫建設の地鎮祭を行った。この奉安庫は大正一四年七月竣工をみた。午前中の式典に続き、正午祝賀午餐会が行われた。その頃第一回の「勤倹力行奨励期間」中で、冗費を省く考慮が払われ、赤飯と簡素な馳走、それに御土産の菓子一折が贈られた。

午後からは東大教授横井時敬博士の「農業教育について」という記念講演、引き続き卒業生大会が行われて幕を閉じた。また学校全館では農産品評会が催され、出品総数二一二七点に達した。

なお、経費は卒業生、在校生、在校職員より一人当たり平均五円以上が醵金され、総額五千円に達した。この時弐百円の高額を醵出された方々もあった。

創立30周年記念式典

大正３年刊　農友会会報

第二節　後　期

一　福井地方陸軍特別大演習と御用栽培

昭和八年、福井地方で陸軍特別大演習が行われた。本校はその御用野菜の栽培を命ぜられ、昭和七年から圃場の一部を区画して従事した。温室八〇坪、圃場三反歩であった。当事者一同は厳重な身体検査を受けて奉耕し、更に土壌も消毒し、肥料も化学肥料が使用された。

ところが、野菜の発育も順調に進んで、あと一旬程で陛下の御料に供す日を迎えるというころ、本校校庭が突然大演習のための大本営直属将校の馬繋場となり、関係者一同はハエなどの伝染病媒介に大変心を痛めたが、圃場全体を一分目の金網で被覆するなどして解決した。

その後、陛下の行幸された一〇月二三日から二九日までの御用には無事責任を果たし、宮内省大膳寮の主膳からは、その品質が優良であるとの賞辞も得、面目を施した。

また一〇月二六日には甘露待従の御差遣があり、上級生は観兵式に参列した。

御料として栽培した野菜（一二種）は次の通りであった。

1胡瓜（温室栽培）　2菜豆（硝子障子覆下栽培）　3三寸人参（にんじん）
4牛蒡（ごぼう）　5大根　6山芋　7海老芋　8八頭芋　9蓮根　10千住葱
11結球白菜　12ほうれんそう

（六〇年史回顧録編　植竹季子雄氏による）

二　創立四〇周年記念式典

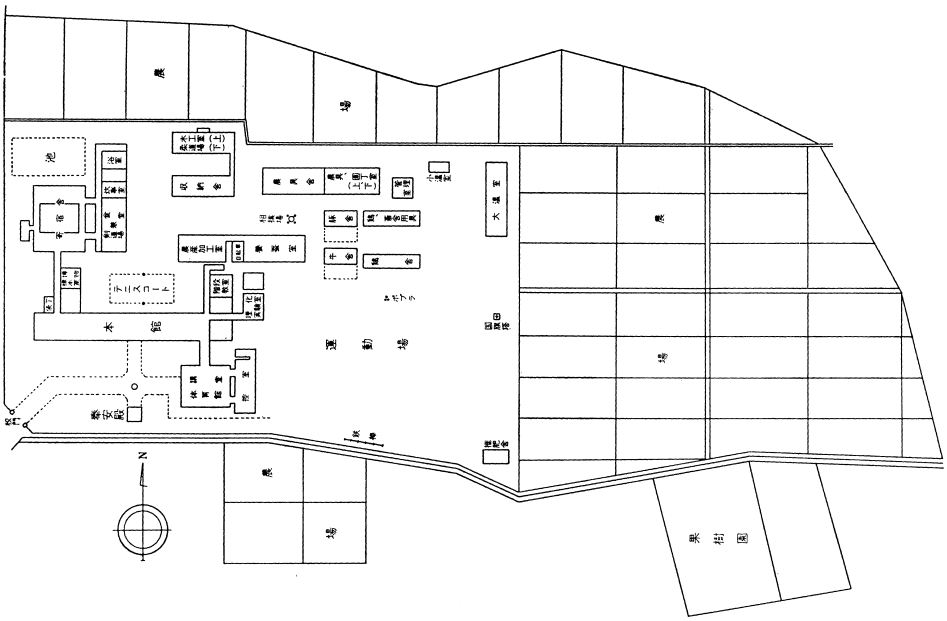
昭和八年、我が国は国際連盟を脱退し、日本を取り巻く国際情勢は今まで以上に悪化した。そのため国内ではいっそうの実業振興が叫ばれ、実業教育五〇周年が実施されていた昭和九年に、本校は創立四〇周年を迎えた。

本校はこの時にあたり、先人の遺徳を偲んで感謝の念を新たにするとともに、将来に対する精進の足取りを固めるために、農村の現状に合致する人物の養成、農業教育の使命、高揚を期して、一一月二三日に記念式典を挙行した。

当日は近藤知事、各学校長、旧職員等一七八名を迎え、知事、文部大臣（代読）、田保県会議長、青山繁同窓会代表の祝辞を受け、高等農林学校長など多数から祝電を贈られる中で、盛大裡に挙行された。記念式では永年勤続職員仕丁の謝恩表彰が行われた。謝恩ならびに表彰されたのは一〇年以上の勤続で一八年勤務を最高とする方々であった。式後は二二〇余名の物故者の追弔会、卒業生大会が行われた。特に卒業生大会では校舎の新築、設備改善を企画する発議があり、後の学校移転新築の動因となった。

創立40周年記念
実業教育50周年記念日の校門

その他学校全館では記念展覧会、品評会が行われた。記念醵金は一、四〇〇円余りで、記念事業として温室の新築があった。



創立40周年頃の町屋校地、農場平面図

三　新保地区移転

昭和一〇年になると、生徒増や実習時間増により狭隘となった校舎の改築や、農場、農舎等、学校施設の充実問題は、学校移転問題にまで発展した。昭和五年に発布された実業学校令改正による実習重視と時間増によって、各農学校は農場などの学校施設の不足をきたしていた。一方農村不況は徐々に進行し県は財政緊縮を緊急の課題としていた。農学校の統廃合問題が取沙汰されたのもこの頃である。（今立農学校、坂井農学校の本校への併合問題化など）

それはまた各地で興産のための農業教育充実要求となり、存続運動、増改築嘆願運動となっていった。こうした中で、今立農学校の場合も当初の増改築要求から昭和一〇年には新校地へ移転、新築着工となったのであった。

昭和九年創立四〇周年記念日当日、卒業生大会で本校の増改築、施設充実陳情決議がされたのもそうした状況の中で行われたのであった。昭和一〇年秋にようやく本校の移転問題が県会で取りあげられることとなった。当時改築総工費予算は一六〇、〇〇〇円余りを要し、その三分の一は地元負担であった。この資金をいかにして調達するかが大きな問題であった。昭和一一年三月一四日農友会総会がだるま屋ホールで開かれた。そこで県下第一の農林学校として恥ずかしくないだけの建物と施設の充実実現が協議された。県補助の他の増改築費用は卒業生の醵金とするとし、常務委員や各村単位の実行委員選出が行われた。

不況下にあって三分の一の地元負担金を集めることは至難の技であったが、卒業生の醵金は一口二〇円とし、これに各郡市の卒業生数を掛けた金額をそれぞれ郡市の負担額として、委員は極力これに達する

よう努力することにした。

一方福井市長に対しても地元負担金の一部負担を陳情した。後にこの三分の一の地元負担金をめぐって各地区からの誘致運動が起こってきた。

当時円山新保地区は吉田郡下であったため、福井市地籍内に残そうとした福井市をはじめ、大野郡勝山町、足羽郡和田村、東郷村、酒生村などから誘致があったが、昭和一二年三月一八日、県は吉田郡円山西村新保に移転することに決定し正式に発表した。その理由は交通の便利と農事経営の必要からみて灌漑排水など水利に恵まれている点が最も適当ということであった。校地敷地は一三、〇〇〇坪、建物坪数二、五七〇坪、移転建築に要する総工費二四六、四〇〇円、そのうち県の起債額一九六、〇〇〇円、残り五〇、四〇〇円のうち福井市一五、〇〇〇円、農友会一八、九〇〇円、その他地元負担金一六、五〇〇円であった。

なお昭和一〇年四月一日の青年学校令公布に伴い、青年学校教員養成所が昭和一三年六月本校に併設された。そしてこの養成所も新保町に移転されることになった。

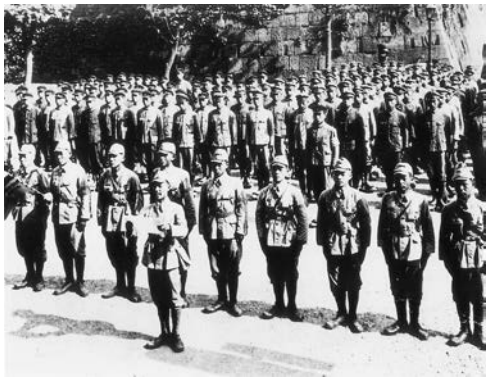
かくて昭和一五年校舎等の新築、施設等の移転が開始され、翌一六年には移転を完了し、昭和一七年一〇月一九日に校舎落成式典が挙行された。この時の校舎建物は幸いにして昭和二〇年七月の空襲では難を免れたが、昭和二三年六月二八日午後五時の福井地方大震災でその姿を失った。

四　戦時体制下の教育

戦時体制は、昭和一二年の日華事変から、同二〇年太平洋戦争の終結までであるが、その間、政治、経済、産業はもちろんのこと教育に至るまで国家的要請に即応する体制がとられた。

農業教育も工業教育もともに重視され、昭和五年四月農業学校規程の改正に始まる実習の重視は、非常時体制下において尽忠報国、農民精神涵養のために、また農業の知識を高め技術を向上させるために強化された。食糧事情の悪化に伴い食糧の確保が至上命令となり、農業教育が欠くべからざるものとなったからでもある。

その後戦局の拡大に伴い、昭和一三年六月集団勤労作業運動実施が通達されこの作業の実施を中等学校以上に指令し、また、昭和一四年三月には集団勤労作業を正課に準じて取り扱うことが指示された。また、昭和一六年一〇月には国民勤労報国令が施行され、国民勤労報国隊に対する協力が義務づけられて、学校においては今までの勤労作業を組織化し、勤労報国隊を編成した。


満州建設勤労奉仕隊（昭和16年）

本校も昭和一六年四月植竹教諭の引率で生徒九名が勤労報国隊として満州浜工省安達県薩爾図（ザルト）の大平原の中央にあった薩爾図特設農場に参加し、四月から七月までの約四ヵ月間トラクターによる馬鈴薯、大豆、燕麦の栽培に当たった。この報国

隊は関東、北陸、中部の三地方各府県立農業学校生徒代表をもって組織され、四月七日より一週間千葉県習志野において訓練を受け、新潟から出発、羅新に上陸し満州国に入った。続いて翌一七年にも友永富教諭に引率されて、生徒一〇名が参加した。このときは本校の他に今立農学校も参加した。

㈠ 戦時下の卒業繰上げと修業年限の短縮

昭和一六年には、国家産業非常体制における労働力確保のために、中等学校についで専門学校・大学と順次修業年限の短縮措置がとられた。そのため、この年から繰り上げ卒業が始まり、本校は昭和一六年度の卒業式を、その年の一二月に繰り上げて実施した。一七、八年度も同様に実施した。更に昭和一八年一月には新たに中等学校令が公布され、中学校、実業学校は修業年限が一年短縮された。つまり従来の五年制が四年制になったのである。二〇年度卒業生（四五回卒）はその影響を受け、昭和二〇年三月に一年短縮の四年生と勤労動員強化のため一二月繰り上げ卒業を延期していた五年生が同時に卒業した。

㈡ 北海道勤労奉仕

昭和一八年から二〇年には三回にわたって学徒勤労動員として北海道の各地に、卒業前年の四年生が出動し、各農家に二～三名ずつ分宿して農耕に従事した。出動人員、出動地は次のようであった。

昭和一八年五月－六月　四年生　七〇名
　　上川郡上士別村奥士別村　大久保・上出教諭引率
昭和一九年五月－六月　〃　空知郡幌向村　富山要吉教諭引率
昭和二〇年五月－六月　〃　夕張地区　清水基道教諭引率

㈢ 通年動員

戦局の国難に伴い昭和一九年二月「決戦非常措置要綱」が発表され、学徒の通年動員が決定されるに及んで、本校では全員が食糧増産、または国防建設の事業に動員された。

特に昭和一九年は創立五〇周年にあたったが式典のみ行い、専ら勤労動員に力が向けられた。高学年生はいずれも農業技術員の補助者として高志地区管内の農業会に配属され、技術指導に従事し、これにつぐ学年は開墾あるいは土地改良事業に出動した。低学年は学校の勤労奉仕計画に基づいて主として学校を中心とする地域、あるいは、出身市町村の農村の労力不足を補い、軍人遺家族の援助に力を尽くした。更に芦原の近くに飛行場が出来ることになり、その整備作業にも出動したり、国際航空工場にも出動したりした。

㈣ 軍事教練

大正一四年四月から陸軍現役将校が学校に配属され、従来の体操のほかに教練、武道が独立して行われるようになった。そして教練の時間には、軍より三八式歩兵銃、村田式銃、騎兵銃等が学校に貸与され訓練に使用された。

昭和八年頃から、軍国主義台頭と共に学校教練は軍事教練としての性格を明確にし、野外軍事教練がしきりに行われた。実弾射撃、軍事講話なども実施され、昭和一二年の日華事変勃発と共に、兵営宿泊や秋季野外演習が行われた。また、学校教練査閲が学校行事の重要なものとして実施され、査閲の成績を上げることが、その学校の評価に繋がるために、職員、生徒は一丸となってそれに励んだ。本校はそのつど良い成績を収めた。

㈤　制服

制服は従来、冬は小倉地の黒色、夏期は霜降りであったが、これより夏冬とも国防色（カーキ色）の一色で通すことになった。また登下校、あるいは歩行中集団をなしている時など先生や軍人に対して挙手の礼をとった。

そのほか、昭和一九年には本校併設の福井県立青年学校教員養成所が、文部省移管のため福井青年師範学校となり、学校長は福井師範学校長が兼ねることとなったので、本校の加藤校長は養成所の所長を退任し、教授として兼任した。

ともあれ、本校の教育も戦時体制の色濃いものであった。

五　女子部の新設

昭和二〇年三月、新たに女子部が新設された。

戦局が進むにつれて召集と白紙徴用がますます激しくなり、在学生の中からも卒業前に志願によって入隊するものが現れ、その生徒たちには繰り上げ卒業の特別措置が認められた。そのような世相下で、男子の労力が不足し、中でも食糧増産に励む農村では農業従事者と共に技術者の欠員が目立って来た。そこで男子に代わる女子技術者の短期養成が急がれたのである。本校においては入学資格を国民学校高等科卒業程度、修業年限は三ヵ年として五〇名を募集した。しかし終戦後の学制改革で学制が変わったため募集も二回で終わった。

六　福井市の戦災と本校

昭和二〇年七月一九日夜半より福井市は空襲を受けた。本校は郊外のため、災禍を免れたが、焼夷弾は飛散し校庭に落下した。校舎附近は福井市内の避難民が群集し、学校は避難所となった。そして避難民の臨時救護所となったため授業をとりやめ、罹災者以外の全教職員生徒は炊き出しその他の救済作業、復旧作業に協力した。また福井県庁の焼失により、本校の一部に県の林務課および保険課が移転し、約一年間執務した。その後一ヵ月にて敗戦となった。

七　敗戦後の学校教育

昭和二〇年八月一五日の敗戦は、我が国の政治、経済、文化など各方面に、いまだかつてない荒廃と混乱をもたらした。教育についても虚脱と混迷の中をさまよい、どのように収拾されるか見当もつかない状況であった。

その中で文部省はまずこれまでの戦時教育体制を一掃して通常授業の回復に全力を挙げ、翌一六日には「学校勤労動員の解除」、二一日に「戦時教育令の廃止」、二四日には「学徒軍事教育および戦時体練等の諸訓令の廃止」、九月一二日には「戦時教育を平時教育へ転換の指示」を発し、敗戦後一ヵ月目の九月一五日には「新日本建設の教育方針」を発表し、国家護持、平和日本建設、科学的思考力の養成などを主柱とした新日本国建設のための方向を明らかにした。

一方、敗戦と同時に進駐した連合国軍は総司令部内に民間情報教育部を設けて教育を管理下におき、国定教科書の廃止、更に一〇月には武道の廃止、更に戦争協力者の教職からの追放、神道教育の追放など

の措置を次々に発し、軍国主義的教育の排除を行った。また福井にも占領軍が進駐し、教育顧問は何度も学校を訪問し、教育の民主化を見守っているという状態であった。

しかし、学校制度や教育方針についての詳細は、いわば手さぐり状態で、昭和二一年になると戦後教育をいかなる体制で組織し、どのように進展させるかが問題とされるようになり、同年三月には第一次教育使節団が来日し、戦後の教育体制に関する基本方針が提起された。

そして、翌二二年三月にはさきに制定された新憲法の精神に基づく教育基本法および六、三、三制の新しい学校教育体系を定めた学校教育法が制定され、戦後のわが国教育の基本路線が敷かれた。

本校はこのような戦後の混迷期にあっても、職員、生徒の活動は活発に続けられた。特に新しい学制による農業高校の特徴として学校農場中心の実験・実習が家庭実習中心になったため、それらの指導方法、内容等の研修として、新潟県加茂農林学校への学校視察、あるいは文部省主催の研修等に林孜教諭を中心に参加し、新しい農業教育のあり方を研究した。

また、当時高等学校設置基準等があり、施設の基準を満たすため、戦後の混乱した経済情勢の中ではあったが、職員、生徒一丸となって資金募集が行われ、約六〇万円程の基金が集められた。それらは戦時中荒廃した施設復旧の経費に当てている。

また、昭和二二年四月には、新しい学制改革のもとに、新制中学校が併設された。それは改革によって従来の国民学校は小学校と改称され、義務制を小学校六年、中学校三年とし、旧制の中学校は三年の高等学校となり、新制中学校は昭和二二年より発足したので、旧制中学校へ入学した三年以下の生徒のための併設中学校であった。

また、この頃学校実習田は、生徒の減少や農地改革による地主からの強い要望もあり、約三町歩程の水田が、昭和二二年三月末日をもって返還されていた。それ以後は県下に誇った広大な農場も今日のようなものとなった。

農林時代	昭一六年一二月第一回繰上卒（四一回卒業）	
	昭一七年一二月第二回繰上卒（四二回卒業）	
	昭一八年一二月第三回繰上卒（四三回卒業）	
	昭一九年	（一二月繰上卒のためなし）
	昭二〇年三月	五年卒（四四回卒業） 四年卒（四五回卒業）
	四月	女子部新設
	昭二一年三月	四年卒（四六回卒業）
	昭二二年三月	五年卒（四七回卒業）
	四月	併設中学校
併中存置の時代	昭二三年三月	五年卒（四八回卒業）女子部第一回を含む 併中第一回卒
二高時代	四月	福井第二高校
	昭二四年三月	五年卒（四九回卒業）女子部第二回を含む 併中第二回卒 二高卒（第一回卒業）
	四月	高志高校
高志高時代	昭二五年三月	高志第一回卒
	昭二六年三月	高志第二回卒
	昭二七年三月	高志第三回卒
	昭二八年三月	高志第四回卒
農林高時代	四月	福井農林高校

旧制から新制への学制の変遷

第五章　福井県立第二高等学校時代

一九四八（昭和二三）年四月～一九四九（昭和二四）年三月

旧制中等学校	新制高等学校	設置課程
県立福井中学校	県立福井第一高等学校	普通家庭
県立福井高等女学校		
県立工業学校	県立福井第二高等学校	工業農業
県立福井農林学校		
市立福井商業学校	市立福井高等学校	普通商業家庭
市立福井高等女学校		
町立丸岡高等女学校	県立丸岡高等学校	普通家庭農業
県立坂井農学校		
県立三国中学校	県立三国高等学校	普通家庭
県立三国高等女学校		
町立勝山高等女学校	県立勝山高等学校	普通家庭
県立大野中学校	県立大野高等学校	家庭商業農業普通
県立大野高等女学校		
県立大野農林学校		
県立丹生高等女学校	県立丹生高等学校	普通家庭
県立今立農学校	県立鯖江高等学校	普通家庭農業
県立鯖江高等女学校		
県立武生高等女学校	県立武生高等学校	工業商業家庭普通
県立武生中学校		
町立武生高等女学校		
県立敦賀商業学校	県立敦賀高等学校	普通業家庭
県立敦賀中学校		
県立敦賀高等女学校		
県立小浜水産学校	県立小浜高等学校	普通家庭水産
県立小浜中学校		
県立小浜高等女学校		
県立遠敷農学校	県立遠敷高等学校	農業
私立勝山精華高等女学校	私立勝山精華高等学校	普通家庭
私立北陸中学校	私立北陸高等学校	普通
私立仁愛高等女学校	私立仁愛高等学校	家庭

（「福井県教育百年史」より）

県立高等学校12校案（最終案）

昭和二三年四月、学制改革によって、本校は福井県立第二高等学校として発足した。

新制高等学校は義務教育のあとに従来の閉塞的な学校間の差別を解消し、あらゆるものに教育の機会とその門戸を解放する主旨のもとで、総合制、男女共学、学区制を実施するためのものであった。

県は昭和二三年三月一三日、旧制中学校を中心に地域的に統合し、新制高等学校を一二校とした。

本校は当初独立農業高等学校となる予定であったが、同年四月一日福井県公示第百一一号により、現在地に県立福井工業学校を併合し、福井県立第二高等学校と称して農、工総合制の高等学校として発足した。農業課程には農業科、林業科、女子部が、それぞれ改革前のものを受け継いで設置された。

校長には本校の加藤竹雄校長がなり、工業学校長は教頭ということになった。生徒は昭和二三年度の旧制中学校四、五年の生徒で構成され、それぞれ新制高等学校一年、二年となった。また旧制の三年生は昭和二二年設置の併設中学校三年となり、希望者には市町村立中学校への転換を認めていた。また五年生の希望者には、昭和二四年三月、旧制中学校卒業を認めていた。併設中学校も同二四年三月の卒業で閉鎖された。

そのほか、教育の機会均等の趣旨から、働きながら学ぶ者のために、

定時制課程も新制度発足と共に開設され、同年六月本校にも夜間農業課程が設置された。生徒数三〇名位であった。その後、この課程は震災のため閉鎖されたが、翌年高志高等学校発足と同時に復活した。

教育内容及び教育課程については、新制高等学校の特色である選択教科制、単位制が軌道に乗らず一部を除いたほかは旧制のまま実施されていた。特に農業課程の教育課程については従来通りの学科制度を踏襲して実施されたが、「耕種」からは「土および肥料」が独立したほか、総合農業、農業工作が新設されていた。成績評価は優・良・可であった。

その他実習はなるべく家庭の課題とするようにとの通達もあり、ほとんど無いに等しい状態で行われた。そのため農業高校の特質は失われ、学校農場の経営には担当の教師が非常に苦労した時期でもあった。

このようにして新教育制度のもとで、福井県立第二高等学校は発足したのであったが、同年六月二八日午後五時過ぎ福井大震災に見舞われ、校舎及び施設のほとんどは崩壊してしまった。当時の生徒の下校時間は午後五時までだったので居残り生徒はほとんどなかったが、ただ一人野菜園芸係として熱心に研究に従事していた生徒が、地震直前に校舎に入り、倒壊した校舎の東階段の下で圧死し、犠牲者となった。

被害は坂井郡を震源地として福井地方全般にわたっていたので当分臨時休校となり、夏期休暇を経た一〇月初旬ようやく授業が再開された。その間職員生徒は後片付けと整備作業に終始した。

授業は残った校舎や軍政部、県から借り受けた天幕の中で行われ、その状態は三学期までも続いた。

一方、学区制の実施により、本校は中学区制（小学区制をいくつか合わせたもの）となり、相当数の生徒が転校した。また、新制中学の発足により併設中学三年で卒業する生徒、また四、五年の希望者で旧制中学校卒業程度として認められ修了して行く生徒、更に新制高校発足後は普通課程を志望する生徒も多かった。農業課程の志願者が減少するという傾向もあり、昭和二三年四月現在八〇〇名を数えた生徒数も同年一二月現在では六五〇名ほどとなり、農業科生徒はその半数以下で、特に女子生徒は僅かに五〇余名であった。

昭和23年12月１日現在　生徒異動調査表

学級／人員	昭二三、四、八現在数	昭二三、一二、一現在数	同上差	転入学者数	転退学者数
高一機械科	16	10	6	2	8
工化科	33	28	5	1	6
紡織科	43	30	13	0	13
染色科	20	11	9	3	12
農業科	55	42	13	13	26
林業科	45	34	11	1	12
家庭科	(女)32	25	7	0	7
高二機械科	16	16	0	0	0
工化科	41	31	10	0	10
紡織科	29	26	3	1	4
農業科	86	77	9	2	11
	(女33)	(女27)	(女6)	0	(女6)
林業科	46	40	6	0	6
高三機械科	53	40	13	0	13
紡織科	13	6	7	0	7
農業科	27	20	7	1	8
	(女8)	(女5)	(女3)	0	(女3)
併中機械科	29	23	6	1	7
工化科	39	30	9	0	9
紡織科	65	60	5	0	5
農業科	54	48	6	0	6
林業科	58	47	11	0	11
計	800	644	156	25	181
	(女73)	(女57)	(女16)	0	(女16)

(備考)
1、高二農及中紡は二学級編成、他は一学級　合計22学級
2、震災によると見られる転退学者約181名中転校者64名

第六章　福井県高志高等学校時代

一九四九（昭和二四）年四月～一九五三（昭和二八）年三月

昭和二三年、新制高等学校は発足したが、翌二四年には県立高等学校の一部編成替えが行われた。それは主に福井市内高等学校で、昭和二三年六月の震災後の学校整備もあったが、学制改革を更に一歩進め、小学区制、総合制の徹底を期するために実施された。

本校は、普通科、家庭科、農業科の課程からなる男女共学の総合制となり、高志高等学校と改称された。そして従来の工業課程は第一高等学校から改称された藤島高等学校に合併された。当時校名も教育の民主化をはかる意図から県立の「立」を省いた。

その後昭和二五年九月御幸下町旧福井高等女学校跡に新校舎が竣工するに及んで、学校の本部と共に普通科、家庭科はそこに移り、南校舎と称し、新保地籍には農業科が残り北校舎と称した。また一時閉鎖されていた定時制高等学校（夜間）を再開し、農業および家庭技芸課程をおき、生徒数各三〇名を以て編成した。しかし、昭和二六年四月定時制の合併が決定し、市内高等学校の定時制は全部乾徳高等学校（現福井商業高校）に移管された。

そのほか、この昭和二六年には本校農業科の学区は全県一区となり、農業課程の中に農業土木科、農村家庭科を新設した。更に三月には昭和の初期から二五年間校長として尽力された九代校長加藤竹雄先生が勇退し、四月に後任として渡辺敬一校長が就任した。

教育課程及び内容については昭和二三年文部省が示した教科課程に基づき実施したが、農業課程は昭和二四年一月の職業教育改正に準じ、卒業の条件八五単位のうち農業に関する科目を三〇単位以上とした。

特に新科目の総合農業にはホームプロジェクト制度が設けられていて本校でも実施した。

科目選択制度が実施されたので、従来各組の教室において受けた授業が、各選択科目に応じてそれぞれの教室で受けることになり、生徒は一時間毎にカバン、靴等を携行して移動していた。また新教育内容であるホーム・ルーム制の採用で、生徒の定位置ともいうべき教室、ホーム担任が設けられていた。

また、生徒会、クラブ活動等も、山岳、演劇、文芸、学校農業クラブ、生物研究、野球、陸上競技、籠球、サッカー、卓球など普通課程の生徒と共に活動した。また運動会をはじめとするあらゆる行事は南校舎で行われたため、北校生はそのつど南校へ行った。卒業式は施設不備のため第二回まで市の公会堂で実施した。

そのほか修学旅行は戦時中、中止されていたが、昭和二五年頃から復活し、関東、九州方面へ旅行した。農業課程は独自の立場で計画し実施していた。

昭和二五年一一月、「みどり葉はにほひにあふれ……」の校歌（森山謙一作詞、石桁真礼生作曲による。現在高志高校校歌）が誕生し、市公会堂で発表記念式典が行われ、声高らかに歌った。

そうした中で産業復興・経済自立が国策として最も重要な基本点となりはじめたのは昭和二五年になってからであった。八月に訪日した第二次米国教育使節団は日本が産業自給国となるためには熟練技術者の養成と職業教育計画の強化が必要であると勧告し、産業教育振興の気運は急速に促進されるようになった。一方、税制改革により明治二七年以来の実業教育費国庫補助金が昭和二五年度に打ち切られることになり、これに代わる国庫の財政援助の必要もあった。「実業教育費国庫補助法」が純粋の補助法であるのに比べてこれは単なる補助法ではなく、他の教育法の補足法として産業教育に対する重要事項を規定しているところに特色があり、「国の任務」として総合計画の樹立、教育内容と方法の改善、実験実習に必要な施設、設備の整備、教員の養成およびその資質向上、産業界との協力の五つの事項を挙げている。この振興法は総合制高等学校における職業課程の教育施設、設備の充実に大きな影響を与え、実業教育独立へのきっかけとなった。

昭和二七年度学科生徒数

南校舎

南校舎においては普通課程・家庭技芸課程は左表のように混合ホームであった。

合計	家庭	普通 女	普通 男	コース／ホーム
48	0	0	48	1 A
41	0	7	34	1 B
48	0	23	25	1 C
45	0	18	27	1 D
48	1	17	30	1 E
45	19	26	0	1 F
45	34	11	0	1 G
38	0	15	23	1 H
44	20	24	0	1 I
41	0	19	22	1 J
443	74	160	209	計
31	0	15	16	2 A
34	1	15	18	2 B
42	0	22	20	2 C
38	1	37	0	2 D
42	20	22	0	2 E
33	0	17	16	2 F
40	39	1	0	2 G
51	0	32	19	2 H
46	0	7	39	2 I
44	0	0	44	2 J
401	61	168	172	計
43	43	0	0	3 A
44	25	19	0	3 B
39	7	18	14	3 C
45	0	28	17	3 D
47	6	25	16	3 E
34	0	8	26	3 F
40	0	10	30	3 G
39	0	0	39	3 H
331	81	108	142	計
1,175	216	436	523	合計

北校舎

計	家庭	農村	土木	林業	農業	コース／学年	
119	0	42	27	50	男	一年	
24	24	0	0	0	女		
66	0	27	21	18	男	二年	
9	9	0	0	0	女		
41	0	0	18	23	男	三年	
0	0	0	0	0	女		
226	0	69	66	91	男	計	
33	33	0	0	0	女		
259	33	67	66	91		合計	

（福井県高志高等学校一覧　昭和二七年五月）

第七章　福井県立福井農林高等学校時代

一九五三（昭和二八）年四月～現在

一　福井農林高等学校の独立

昭和二八年四月、北校舎にあった農業課程は高志高等学校から分離し、福井県立福井農林高等学校として独立した。同年五月五日には独立記念式典を挙行した。

終戦後間もなく、総合制高校として、新しい理想を掲げて発足した新制高志高校の、農業課程であったが、戦後復興の校舎建築は、主として新しい土地（御幸町）に移った普通課程校舎に集中して、北校舎は施設、設備等充分な整備がされず旧態のままに置かれていた。

この頃から南校舎では生徒が急増したが、農業課程は旧態のままであった。こうした情勢の中で、農業教育の将来が憂慮されるようになった。すでに二四年一一月には旧同窓会役員有志は他の農学校関係者にも呼びかけて「農業教育振興期成同盟会」を結成し、同年末県当局、県議会に対して「単独農学校設置」の陳情を行っていた。その後二六年八月には福井農林高校「独立運動実行委員会」が結成され、森永孝委員長を中心に強力な運動が押し進められた。

一方戦後の産業界の立ち直りは二六年、産業教育振興法を生み、二七年県産業教育審議会は県内各校における職業教育の実情調査を行い、単独職業高校設置の方向を示した。二七年五月、農友会は臨時総会を開いて農林高校独立と県下農業教育振興を図る決議文を採択、二八年一月には福井市議会、ほか各種団体に呼びかけ「福井農林高等学校独立促進同盟」が結成され、二月県会にむけ陳情書が提出された。昭和二七年一一月県産業教育専門部会では、農業三、工業、水産各一の独立職業高校設置を最終案として決定、県教育委員会に答申していた。乏しい県財政の中ではあったが、昭和二八年四月、高志高等学校から分離独立することとなった。

勝山高校より赤沢虎太校長を迎え、農業、林業、農業土木、農村家庭の四学科を有する農業高校として発足した。また学区制も一部改正されて、本校の学区は全県一円となった。

㈠　独立記念式典

待望の独立となった本校は昭和二八年五月五日独立記念式典を挙行した。

式典は五月晴れの佳き日午前一〇時より講堂において、来賓、父兄多数の参列のもとに行われた。学校長の式辞に続いて県知事、副知事、教育委員長、教育長、農友会長等の来賓祝辞があり、盛大裡に挙行された。また各方面から祝電も受け、職員生徒一同その喜びと将来の希望を新たにしたのであった。

更に式典に引き続き独立に尽力された多数の方々の労がねぎらわれ、同時に各方面の協力に対して感謝状が発送された。式後校庭において

は、ついこの間まで同じチームメートであった高志高校野球部を迎えて記念野球試合が行われた。

またこの日を記念し、独立高校としての意気を高揚させるため、全校生徒によるマラソン大会（男子一万m、女子四千m）を行うことを決定した。

㈡ 校章・校名旗・女子制服の制定

独立と同時に校章が制定された。世界的な美術界の巨匠雨田光平氏に依頼して造られ、白線二本と共に生徒の帽上に輝くこととなった。氏は独立式典に祝辞を述べられ、校章の意義を次のように開陳された。

土を愛し空を我物とせよ

雨田光平先生の言葉

私はこの徽章で自然の根幹を象徴しようと試みた。そしてある点まで成功していると思っている。中心の樹は上昇的な青年の意欲と個性の確立、一道探求精神と遠く民族的な伝統に連なるものの姿だ。水平の線は大地で平和と均衡と抱擁、連繋を表わす。地下には畏敬すべきあらゆる胚種を育くませ、世紀の年輪がうず巻いている。

三角形は形体の基本だけでなく我々は永遠なる安定の真理を見出し、解体、造型の思弁とする。

大地に奉仕する人達。君達は正に自然に仕える芸術家である。絵筆とクワと違うだけだ。

森に寝て狩猟の夢を見よ。耕して汗し、一すくいの清水に渇を医する時、心に原人のナイヴィティを取り戻すであろう。土を愛し空を我物とせよ。君達に幸あれ。

また秋には生徒会の要望により校名旗（紫に校章と校名が白く染抜かれた校名旗）が作製された。

独立とともに女子制服は夏は白のブラウスに空色の紐ネクタイ、紺のジャンパースカート、冬はこれに背広型の上着を着用することに制定された。

女子制服の制定

女子夏制服

㈢　教育目標の設定

本校の教育目標は、四月の独立後、教育目標設定委員会にて検討され、一〇月職員会議によって可決された。

教　育　目　標

わが国は、新たな日本再建の出発に当り、人類普遍の原理に基き、民主的で平和な文化国家建設の理想を高く掲げたのである。従って教育に対する根本理念は、新憲法に示されている国家理想と一致し、この理想の実現は、教育の真の目的でなければならない。教育基本法においては、教育が何よりも、まず平和的な国家及び社会の形成者として、人格の完成を目指して行われるべきであると宣べている。人格の完成とは、個人の価値と尊厳との認識に基き、人間のもつあらゆる能力をできる限り、しかも調和的に成長発展せしめることである。即ち、真理と正義を愛し、個人の価値をたっとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた、心身ともに健康な国民の育成にある。

国家経済の自立安定は、また、国家の維持発展の最も重要な根底である。特に資源の貧困、国土狭隘のわが国の実情にあっては、産業経済の発展及び国民生活向上の基礎の確立は、絶対使命といわなければならない。この使命の実現は、一に産業教育の力に俟つより外はない。産業教育振興法に明示するが如く、産業教育を通じて、勤労に対する正しい信念を確立し、産業技術を習得させるとともに、工夫創造の能力を養い、もって経済自立に貢献する有為な国民の育成にある。要するに、教育の目的は、民主的で平和な文化国家及び産業国家建設の理想達成にある。

産業教育中、最も枢要な農業教育を担う本校の教育は、将来農業を営み、或は一般農業、林業土木の技術者として農業に関する職業に従事し、わが国農業の改良、発展の指導者となるため必要な科学的、実際的能力の養成にある。なお、農業のよき理解者、協力者として、女子に対しその個性に即応した家庭科の教育が切に要請されるのも当然である。本校における家庭科の存置は、正にこの理由に基づくのである。

本校は以上の教育目的実現のため、左に教育の主要目標を選び掲げ、これに全校の教育力を集中し高等普通教育を基底として専門農業教育を施し、もって農林高等学校としての真価を発揮したい。明確な知識、厳粛な心の態度、麗しい感情を併せもつ自主、自律の実践人が教育の理想像である。

本校の教育は、師弟相互の信頼と誠実によって行われる。かくして、教育の種々の困難は克服せられ、明るい希望を抱いて強く正しく生きる真摯な学徒に日一日と成長させて行く最も望ましい教育の場が醸成される。よき校風は、学校教育の最良の環境である。

教育は、その目的に対する不動の信念に立ってこそ、熱烈な教育者精神のもと、卓越した識見及び教育技術をもって、相共に協力して熱誠を傾け得るものと確信する。

目　　標

民主教育の第一の目標は「個人の尊重と人格の完成」である。個人は、まず人間として形成されなければならない。より高い人格は、各分野において、より勝れた有能人を成長させる。この認識のもとに、教育は各目標の総合的達成を期して行われるべきである。

一、人格教養

(1)　個性の育成

あらゆる機会と場所において、自主性、創造性に基づく個性の伸張と能力の成長を図り、最大限度の自己実現の達成に努めなければならない。自主、自発性は、あらゆる活動、成長の根源である。よき社会人は、各自が自己を完成し、その潜在能力を発展さ

せることによって公共の福祉に貢献する。

(2) 徳性の育成

自己の人生に対し、その意義、目的を深く追求しようとする傾向は、道徳的資質の芽生えである。この傾向を捉えて適当な指導を与え、道徳的心情を伸ばすとともに、社会生活に関する豊かな経験と広く深い理解とによる健全な批判力を養い、知行一致の個性の確立した自律的実践人を育成する。道徳的行為は、すべての行為の基盤となって人生を秩序づけ、人生の平和は秩序の中から生まれる。

(3) 知性の育成

つねに実験、観察などを通じて、真理追求の科学的知識を啓培するための学習を基調とし、計画的、創造的、実際的能力を養成する。学力の向上充実は、明確な知識を形成し、明確な知識はあらゆる文化創造の母胎である。

二、専門的教養

(1) 勤労に対する正しい信念を、農業教育を通じて確立する。

(2) 農業に関する技術の科学的根拠の理解とともに、それらの技術の科学的向上に必要な知識と理解を養う。

(3) 農業に関する技術に習熟し、進んで工夫、創造する態度を養う。

(4) 農業に関する経営的能力を養う。

(5) 農業及び農業生活に、喜びや楽しみを感ずる愛農精神を養う。

(6) 女子に対しては、特によき家庭人としての知識、技能、態度を養う。

㈣ 校歌の作成

昭和二九年二月、校歌作成委員会（戸田三郎、帰度清徹、藤井清、三上健二の四教諭）が構成され、当時福井県立図書館長の加藤恂二郎先生に作詞を委嘱することになった。加藤氏は本県出身であり、旧制高等学校教授、或は文部省の督学官として長く教育界に活躍され、翻訳、詩集、随筆などの著書も多く、校歌作成には最適の人であった。加藤氏は来校されて本校の歴史、教育方針、或は学校環境をつぶさに調査の上、作詞の構想を十分練られるなど非常な熱意を示された。

作曲は五月二六日、東京芸術大学教授石桁真礼生先生に依頼した。石桁氏は、昭和一三年より同二一年まで福井師範学校に音楽の教師として勤務され、今日まで数多くの作曲をされていた。石桁氏もまた、作曲に深長な構想を重ねて、昭和三〇年二月一八日に漸く完成されたのである。

卒業生の寄贈により購入したヤマハピアノも、二月一六日に到着し、同二二日には全校揃って初の校歌練習を実施した。昭和三〇年一一月一九日の本校創立記念式の際に、校歌発表会が催された。

大地は我等の命

作詞者　**加藤恂二郎先生の言葉**

越前の農林高校という制約のもとに農林業の自覚と学徒のほこりをうたったものであります。

校歌としては軍歌調の勇ましいものでなく深く学徒の胸に喰い入るしみじみしたものにしたいと思って詞をえらびました。

中心的なものは大地は我等の命であるという精神です。それで

各章に大地という文句を入れました。
第一の章には越前という位置と歴史ある学校ということ、第二の章には勤労と農林業が無から有を生むものということ、第三の章には科学的農林法と智徳の研修と若人の誇りということをうたったつもりです。

作曲者　**石桁先生よりのお手紙**

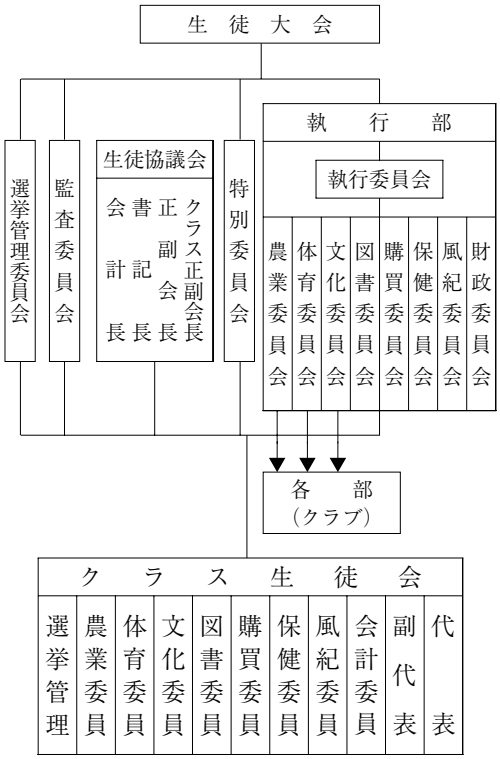
前略　貴校々歌作曲漸く昨日完了心からうれしく思っています。加藤先生も前から待ち焦がれておられたことと存じますが、お聞きになると、きっと、きっと満足して下さると思います。
力強く、しかも静謐で、心の奥深くしみ入るような浪漫精神を具え、なお気品がほしいと思って作曲したのですが、われながらこの点まず生かされていて、これなら永らくお待たせした甲斐があったと慶びにたえません。
この上生徒諸君に愛唱されることをのみ念願しています。あらゆる機会に校歌を唱和するためにお与え下さい。そのうちに生徒諸君の心にしみ入ると思います。　敬具

㈤　新生徒会の発足

四月、長年の懸案成って独立した本校は、生徒、職員ともども新しい校風づくりと発展を願って意気軒昂としたものがあった。戦後高等学校の統合が行われて以来、充分な整備がされなかったので、当時校地内には震災で倒壊した校舎のコンクリート基礎がまだ残っていた。二七年九月から校地整備にとりかかっていたが、二八年には新学期早々から各クラス単位の当番制によって、放課後職員生徒一体となって行った。汗にまみれながらコンクリート基礎を取り壊し整地作業に励む生徒、教師の涙ぐましい活躍は通行人をも感激させた。
また新しい生徒会の発足、新生した部の活躍と独立校としての感激と決意は全校あげていよいよ盛んとなり田植上簇祭、農業文化祭等、生徒の活動にも見るべきものがあった。
昭和二九年は産業教育七〇周年にあたり各行事が盛大に行われた。産業教育に関する歌詞、ポスター、標語、研究論文等、本校からも応募し多数の入賞者を出した。また一一月一九日から三日間、福井市公会堂において開かれた展覧会には、本校より「稲の生いたち」「これからの果物の生産」「水田酪農の実態、廃鶏利用、蚕桑のすがた」「樹を利用するまで、北潟湖干拓の構想」「和式水田用作業衣一式・同畑用作業衣一式」を出品した。また平板および路線測量競技に参加し優勝した。

放課後も校地整理

生徒会活動組織



生徒会クラブ

体操部	野球28	籠球	蹴球28	相撲28	陸上	排球	卓球29	庭球	柔道	体操30	山岳	水泳29

文化部	文芸28	新聞28	演劇29	弁論	書道29	放送	生花30	珠算30	語学35

農業	作物園芸	農業機械	畜産	植園	林産加工	農産加工	土木	家庭

（数字は発足年度）

㈥ 建設促進期成同盟の活動

単独農業高校としてまず急がれたのは校舎建築と施設・設備の充実であった。昭和二八年、着任まもない赤沢校長は時のＰＴＡ会長山形孝氏らと協議し、農友会に働きかけ、建設促進期成同盟を結成して県への陳情を開始した。

昭和二九年春から校舎増改築工事が始まり土木教棟、化学教棟、養蚕、畜舎、更衣、農具室と次々に建築、一一月完成した。昭和三〇年三月には作物教棟、農産加工教棟、園芸倉庫が完成した。しかし、昭和二三年の大震災で全壊の痛手を受けてから八年後の本校の建築率はまだ全体計画の三割強という状態であった。三一年には寄宿舎を増築、三二年には農場実習教棟、家庭科教棟が完成し、校舎再建は青写真にそって、着々と実行に移されていった。そしていよいよ本館建築、講堂体育館建築が残されるだけとなったが、この頃になって、県財政においては震災復旧費の計上も少なくなり、学校復旧建築の予算獲得も新段階に入った。

本来県立であれば県の財政によって建設されるのが本則と考えられるが、県財政の貧困から地元負担金は大きく、地元の財政援助がなければ県立高校建築は不可能であった。当時は他の県立高校の状態もほぼ同様であった。そのため当初の計画は永久建築を考え、鉄筋三階の本館建築構想であったが、昭和三二年四月、木造に変更して建築を急ぐこととなった。昭和二九年より建築資金として生徒、職員各自年額一、二〇〇円ずつ拠出、新入生には二万円の担保貯金を依頼していたが、昭和三三年一月のＰＴＡ役員会で「昭和三三年度の県予算に本館建築費（一、三二〇万円）を通過させるため、地元負担金、立替金として五〇〇万円を準備する」ことを決定、六月七日のＰＴＡ総会で「建築費全額八〇〇万円をＰＴＡ会員から借り受け、県当局へ立替えるこ

とによって目的を達成する」こととした。こうして三三年九月県会で更正予算が通過、本館建築に着工、昭和三四年五月、木造二階本館の完成をみたのである。

二　創立六〇周年の頃

本校は戦後独立農業高校としてその目的に向かって歩みを続け、昭和三〇年四月には園芸科が新設された。その前年昭和二九年に創立六〇周年を迎えたが、この年は産業教育七〇周年が全国的に実施されたので、記念行事は、昭和三〇年一一月一九、二〇日に行うこととなった。式典は一一月一九日午前一〇時より講堂において盛大に挙行された。校長式辞に続き知事・教育長・農友会長・前校長加藤竹雄氏等の祝辞や生徒代表の宣誓があり、来賓・農友会・父兄の参加の下に順調に式を閉じ、同時に校歌発表会を行った。終わって同講堂において祝宴が行われ、懐旧談に花が咲き一二時半散会した。一方生徒会では、例年の文化祭を記念祭に切り替え、演劇やクラブの展示会・バザーが全校教室を開放して行われた。その一室に記念室を設け、六〇年の歩みを回顧する品々が展示され、翌一一月二〇日も一般に公開し、多数の観覧者でにぎわった。なお、この日を記念するため、校舎前庭の植物見本園に、生長が盛んで材質もよく、本校発展を象徴するにふさわしいメタセコイアが記念樹として学校長の手で植えられた。又福井市西勝寺において物故者の慰霊祭も厳粛に執行された。

三　創立七〇周年の頃

昭和三八年は「三八豪雪」ではじまり、また当年は全国的な高校生急増期を迎えて農業土木科が二クラスとなり、戦後最高の生徒数となった。さらに新学習指導要領の実施、本校初の鉄筋三階建て教棟の落成、創立七〇周年記念式典の挙行もあって、校内は活気に満ちた。

昭和四一年、福井国体を二年後に控えて本県のあらゆる目標が、この福井国体にしぼられた観を呈し、本校でもこの目標に向かって、選手強化、マス・ゲーム練習、花壇コンクールの実施など活発に活動した。あけて同四二年、全国高校総合体育大会、同四三年、明治一〇〇年記念、第二三回国民体育大会にはそれぞれ、陸上、相撲、女子バレー、重量挙げなどが出場し活躍した。

一方、施設状況においては、体育クラブ室（三九年）、相撲道場（四一年）、プール（四二年）など一連の体育施設、更に近代農業教育を反映して農業機械格納庫（三九年）、次いで演習林宿舎、園芸実験室、温室一棟（四〇年）の新築、第二農場の開設（四一年）、寄宿舎の増築（四二年）等があった。

昭和四四年、新しく真柄佐次校長を迎え、第二本館の建築に着手、昭和四五年落成をみたが、その年の六月福農史上初の現職校長の死去となった。現職員の死去は昭和四〇年一〇月の文化祭実施期間中、高橋一男教諭の死去に続く再度の不幸となり深い悲しみに沈んだ。

昭和四五年、校長なきあと年度途中でもあり、村田吉高教頭が事務代行し、九月新しく県教育委員会より西谷寿道校長を迎えた。

四〇年代に入った社会状況は、高度経済成長、国民総生産の上昇拡大、人類最初の月世界踏査が示すように科学、技術の飛躍的発展を遂げ、また反面、交通問題、物価上昇問題、所得格差の拡大、公害問題、

ベトナム戦争拡大などいろいろな社会問題も生まれた。教育においても年々高まる高校進学率と共に、それら時代の影響を受けて「期待される人間像」「後期中等教育の拡充整備について」など一連の教育改革が行われはじめた。そして昭和四三年の東大、日大をはじめとする一連の学園紛争は全国的な規模で高等学校にも波及し、それに拍車をかけていた。

本校では福井国体後の四四、五年を中心に従来の校内諸規定に対する検討、改正、生徒心得の一部改正などが行われ、生徒会に新しい活動がみられた。

中でも長髪問題については、指導部（学校側）と生徒の間で活発に論議が交され、ついに昭和四四年一二月二二日生徒指導部長より長髪を許可する旨の発表伝達があった。そして四六年には廃帽も認められた。

また、本校生の男女比も変化が見られ、昭和四一年農業土木科は一クラス減少し、生活科の一学級増、それに四三年園芸科、四五年農業科にそれぞれ女子生徒が入学し、女子生徒が年々増加している。生徒の進路状況においても職業構造の変化と共に多種多様になり、四〇年代に入ると求人開拓をしなくとも一〇〇％就職を記録するようになった。

昭和四七年、武道館が完成し、更に第二農場には教室、宿泊室、園芸実習室などが完成して、ますます本校教育の発展が期待された。またこの年は学制発布一〇〇年目にあたり、全国的に記念行事が催された。本校も県下の諸行事に参加した。

単独農業高校として発足した本校はそうした中で新しい教育理想の実現に向かって再建充実への努力が重ねられ、昭和三八年一一月六日には創立七〇周年ならびに校舎新築落成記念式典が挙行された。

創立七〇周年・校舎落成記念式典行事日程と内容

昭三八・一一・五

九時	受付開始
九時三〇分	七〇周年、校舎落成記念開会式（父兄生徒参加）
一〇時	記念講演会　同志社大学教授　青井厚氏（本校第二六回卒）
一一時	演劇（本校演劇部）およびブラスバンド演奏（バンド部）
一二時	祝飯　記念品（父兄）
一三時	生物慰霊祭
一六時	終了
付属行事	バザー、展示会、農産物即売
一一・六	
一〇時	記念式典、式典後記念植樹
一一時	祝宴（立食、講堂）
一三時	農友会慰霊祭（図書室）
一四時	農友会総会（〃）
一六時	終了
付属行事	バザー、展示会農産物即売、展示物即売（一四時より）
一一・七	
八時四〇分～一〇時	後始末
一〇時	柔道模範演技
一〇時三〇分	フォークダンス
一二時三〇分	祝飯（全校）
一四時	閉会式

永年勤続表彰者

職名	氏名	就任（発令年月日）
教諭	林　孜	昭和一九・一〇
実習助手	内田　長司	〃二〇・三
〃	山本鉦一郎	〃二二・七
教諭	金谷　仁吉	〃二三・四
〃	金谷　精	〃二三・四
〃	高島　市郎	〃二三・四
講師	大久保　忠	〃二四・三
実習助手	毛利　義照	〃二五・三

職名	氏名	就任（発令年月日）
教諭	野尻　憲治	昭和二五・六
実習助手	山下陽一郎	〃二五・九
教諭	帰度　清徹	〃二六・四
〃	竹澤　喬	〃二六・四
〃	吉川　幸雄	〃二六・四
よう人	大久保正士	〃二七・四
教諭	浅井　義則	〃二八・四
〃	白川滝之助	〃二八・四

四　創立八〇周年の頃

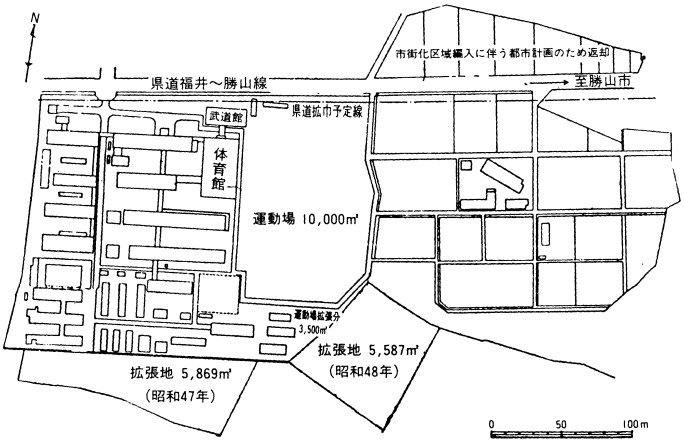
昭和四六年の日本学校農業クラブ全国大会岡山大会では、昭和四八年度開催地を福井をはじめ北陸三県に決定し、昭和四七年一月第二回準備委員会で本校は農業鑑定競技大会会場となることを決定した。

また、福井県立福井農林高等学校となって、二〇年を経た昭和四八年は本校創立八〇周年の年であった。そのため昭和四六年六月、第一回八〇周年記念事業準備委員会を開催し、その準備に入った。

昭和二八年四月、単独校として独立して以来、校舎建築の努力が続けられ、第三期工事の三階鉄筋教棟も完成していた。次には校地の環境美化とあわせ園芸科、林業科など造園教科の実習見本園が必要であるとして、昭和四四年頃から、平泉寺演習林で産出した岩を少しずつ運び込み中庭造成を進めていた。四五年八月に農友会から八〇周年記念事業として母校に寄附したいという申し出があり、学校側は当時進めていた中庭造成計画を要望として出し、一〇月の農友会総会において、和風庭園、現代和風庭園、洋風庭園の三庭園寄贈が決定された。造園工事は四五年秋から開始され四八年一〇月に完成した。主要な工事は業者に依頼、簡単な工事は生徒の実習時間を利用して作業にあたった。総工費は三三〇万円であった。

中庭庭園造成工事が着々と進められる中、他の校舎敷地美化のための花壇づくりや整地作業が学校をあげて実施された。校門周辺の整理、家庭科教棟南側花壇づくり、樹木植付、物理室南側花壇づくり、体育館南側、西側切土運搬、砂利運搬、工作教棟南側の花壇づくり、芝張、樹木植付、路面整地などであった。縁石工事や、側溝埋設など大きな工事には業者も入って、園芸科、林業科の教科実習とあわせ全校職員、生徒の協力のもとに実施した。昭和四七年一一月には、御影石の校門が揚原新十郎氏より寄贈されていた。こうして日本学校農業クラブ全国大会、八〇周年記念日当日には、中庭庭園も完成し、学校の外観は一新したのであった。

明けて昭和四八



拡張された南側校地

年、新学期開始と共に学習指導要領改訂に基づく新教育課程を実施し、校地東側隣地に一一、四〇〇㎡に及ぶ校地拡張がなされ、将来の本校教育、施設充実が期待される中で、一〇月二五日第二四回日本学校農業クラブ全国大会農業鑑定競技大会を実施し、同年一一月一〇日本校創立八〇周年記念式典を盛大に挙行した。

創立八〇周年記念式典行事日程と内容

第一日（一一月一〇日）

九時三〇分　式場入場整列
一〇時　記念式典（来賓、父兄、生徒参加）
一一時一〇分　祝賀演奏（本校邦楽クラブ、吹奏楽クラブ）
一一時四〇分　記念植樹（知事、教育長、農友会長、学校長、ＰＴＡ会長、生徒会長）
一二時一〇分　祝飯、記念品（父兄）
一時　ジョイント・リサイタル（阿部保夫氏、新井克輔氏によるギター、ハーモニカ演奏）
一時三〇分　農友会総会
二時三〇分　招待バレーボール試合（石川県金沢商業高等学校）
二時四〇分　農友会顕彰碑除幕式
四時　Ｓ・Ｔ　フォークダンス
四時五〇分　終了

付属行事　農具・民具展、八〇周年資料展バザー、耕志会盆栽展
展示　農業科（郷土農業の歴史と展望）、園芸科（園芸科の歴史と展望）、林業科（七〇年代の緑化課題）、農業土木科（九頭竜川と橋）、文化クラブ（ＪＲＣ、保健部、工芸部、美術部、書道部、華道部、図書同好会、写真部）

第二日（一一月一一日）

九時　記念講演　東京教育大学教授　農学博士　小笠原八十吉氏
一〇時一〇分　生物慰霊祭
一〇時三〇分　演劇発表
一時　ブラスバンド演奏
二時　軽音楽
三時五〇分　Ｓ・Ｔ
四時　フォーク・ダンス
五時　終了

付属行事　前日に同じ

感謝状授与者

寄贈者　農友会長　森永　孝氏（記念庭園）
揚原新十郎氏（校門）
山崎　善弘氏（山崎文庫）
西村　嘉一氏（ステージ幕）
耕志会長　野村　武氏（講演用テーブル）
木下　八郎氏（放送設備一式）

以上六名

永年勤続者（一〇年以上）四八・一一・一日現在

高島　市郎　浅井　義則　林　孜　白川滝之助
加島　守一　辻　千鶴子　小林　一郎　牧野昭二郎
竹澤　喬　西澤　薫　今田惣兵衛　酒井　武夫
藤澤　勝一　松下　静　竹内　謙二　米谷　克也

小澤　重徳　内田　長司　竹内　正宏　平山　昇
浅川　洋幸　宇都宮秀男　平山　計子　西脇　登
山品　貞夫

以上二五名

五　創立九〇周年の頃

昭和四九年四月、本校は福井県教育委員会進路指導研究指定校として、四九、五〇年と二年にわたり進路指導の研究を行なった。「農業高等学校において生徒の希望を生かす進路指導はどうあるべきか」というテーマのもとに、全教員が四班構成のいずれかの研究組織に加わり、研究活動が進められた。

昭和五一年には職業学科への理解を深め、その本来の目的が十分達成されるような生徒の入学を目的とした推薦入学制度が導入された。

本校においても推薦入学者は、各学科においてリーダーシップをとり、生徒会役員として活躍するなど、この制度のねらいはかなり実現された。

また、同年に急速な都市化の流れの中で林業科は体質改善を迫られ、「林業緑地科」という新学科として再発足した。

昭和五三年には職業教育の当面の改善策の一つとして推薦入学制度とあわせて「くくり募集」「一括募集」の検討が始められ、昭和五五年度入学の農業科、園芸科の生徒から「くくり募集」が実施された。

昭和五六年は「五六豪雪」ではじまり、また老朽化した寮を全面新築する運びとなり、翌五七年五月、待望の寄宿舎（修明寮）が完成し、寮生は新寮への移転を完了した。

昭和五七年、本校は福井県教育委員会より「教育課程研究校」の指定をうけて、五七、五八年の二年にわたり教育課程の研究を行うこととなった。

なお、研究主題は「地域の産業構造の変化や生徒の多様化に応じ、農業教育を改善及び充実させるための教育課程のあり方」に決まり、全教職員が三つの研究班に分かれてそれぞれ具体的な研究テーマのもとに研究をすすめた。

昭和五八年には木造の本館（管理教棟）が鉄筋校舎に改築されることとなり、取りこわされ、明くる五九年に現在の本館が完成した。

それとあわせて勝山街道沿いの生垣をブロック塀にするという話が農友会からあり、九〇周年記念事業として学校に寄贈された。

昭和五九年五月、本館落成並びに創立九〇周年記念式典が盛大に行われた。

創立九〇周年記念式典式次第・祝賀会次第

式典次第

一同敬礼　一〇時
開会の辞
君が代斉唱
学校長式辞
県教育委員会挨拶
祝　辞　知事・県議会議長　来賓紹介　祝電披露
工事経過報告　県営繕課長
感謝状贈呈　ブロック塀（農友会）演壇（耕志会）
絵画（森永孝氏・桜川厳男氏）
永年勤続者表彰（一〇年以上）
竹澤　喬　西澤　薫　小澤　重徳　宇都宮秀男
今田惣兵衛　竹内　正宏　浅川　洋幸　平山　昇

牧野昭二郎　小林　一郎　松下　静　西脇　登
前田　昭信　増田　信子　丸田　英美　山内　雅夫
蛇渕　忠重　三上　實雄　中山　善勝　下牧　修
荒川　忠典　山崎市兵衛　南　利治　宇野　亨
青木美恵子　大久保裕介　堀田　勇　増田三代次

挨　拶　農友会会長、ＰＴＡ会長
生徒よろこびの言葉　生徒会副会長
校歌斉唱
閉会の辞　一同敬礼　一〇時五〇分
記念講話　「農業教育の事始め」　第九代校長　加藤竹雄先生
一一時～一一時四〇分

記念祝賀会

開会のことば　一二時五〇分　ＰＴＡ副会長（清水）
実行委員長挨拶　揚原新十郎
学校長挨拶
乾　杯　加藤竹雄元校長
祝　宴
万　歳　笠羽清右ヱ門
閉会のことば　農友会副会長（和田）

六　創立一〇〇周年の頃

昭和六〇年代に入ると、従来実施されていた行事のいくつかが見直された。その一つはマラソン大会であった。学校周辺の道路の交通量が増え危険になったことと、生徒の意欲が減ってきたことにより、危険性が少なく、かつ成就感が得られるということで開校記念強歩大会に変更されることになった。第一回は昭和六〇年五月二日、快晴の中で行われ、大成功を収めた。

また、九月に体育祭、一一月に農文祭と分割してきた行事を、準備時間の集中ということで学校祭として統一して行うことになった。六三年は一〇月五日から七日までの三日間、体育祭一日、文化祭二日の日程で行われた。この形は平成三年まで続いた。

修学旅行についても名所旧跡巡りから体験的学習への切り替えを計り、平成元年度からスキー体験修学旅行に変更した。

さらに教育課程の面では、昭和六二年に発足した校内農業教育委員会が「長期的展望に立った本校農業教育のあり方」の検討を目的として発足したが、翌六三年後半からは学科再編問題を検討することになった。その後平成二年には中学卒業生の減少への対応として本校も一学科減となる四学科での再編が県の方針として出された。

それを受け、平成三年には生物生産系学科、環境開発系学科、生活科学系学科、生産流通系学科に集約し、六月二七日に生物生産科、環境工学科、生活科学科、生産流通科の四学科とすることが決定された。

教育内容は、生物生産科は最新の生物工学基礎を取り入れて、露地コースと施設コースを設置し、環境工学科は環境技術を取り入れて、緑化コースと土木コースを設置し、生活科学科には社会福祉基礎や老人介護等の福祉の科目を取り入れ、生産流通科は、生産から流通までを学習する新しい学科として、情報基礎、簿記会計、総合実践、商品等を幅広く学習することとした。

新学科は平成四年四月から、各学科四〇名でスタートした。

一方、施設設備面では昭和六三年度に二階建ての園芸実習棟が完成し、平成三年度には第一体育館改修工事、四年度には第三教棟リフレッシュ工事が行われた。

㈠ 記念行事

1 記念式典

明治二七年一〇月農事講習所として開校してから一〇〇周年にあたる平成五年一〇月二三日、来賓、ＰＴＡ、同窓生四〇〇名を迎え、在校生、教職員を合わせて総勢九〇〇余名が参列し、本校第一体育館において記念式典が行われた。

午前一〇時、開式の辞、君が代斉唱に続き、創立以来一〇〇年の間に亡くなられた恩師、同窓生に対し黙祷が捧げられた。次いで学校長式辞、東郷重三実行委員長、道端茂昭ＰＴＡ会長の挨拶、渡辺智副知事、宇野繁太郎県会議長、辻和彦国会議員、江守幹雄教育委員各氏の祝辞の後、谷口尚夫事務局長による記念事業経過報告、永年勤続者二九名の表彰と感謝状贈呈が行われた。最後に生徒を代表して生徒会長の岩佐康平君が喜びの言葉を述べた。

100周年記念式典校長式辞

生徒代表よろこびの言葉

またこの日は生徒玄関前大量炊事室で「民具展」が行われた。これらは八〇周年記念の折に収集し、保管されていたもので、今は全く見かけられなくなった伝統的農村生活の様子が再現された。

2 落成式、完成式

式典の開始に先だって、午前九時に一〇〇周年記念事業として造られた記念会館、及び記念庭園の落成式と完成式が行われた。庭園入り口で東郷重三実行委員長、学校長、蓮川貢県教育長、山本芳男農友会代表、山崎善弘農友会顧問、道端茂昭ＰＴＡ会長によりテープカットが行われ、農友会館二階ホールで落成式が行われた。式は東郷委員長の謝辞のあと、蓮川教育長の祝辞、谷口事務局長の工事経過報告がなされた。ついで、会館、庭園の設計者、施工業者、書画等の寄贈者に感謝状を贈呈した。

3 記念祝賀会

式典終了後、会場をフェニックスプラザに移して記念祝賀会が盛大に行われた。午後一時、七五〇名が参加し、東郷実行委員長の挨拶、蓮川教育長の祝辞の後、和装に威儀を正した橋本雅人氏（農高二四回卒）、実行委員長、学校長、ＰＴＡ会長、囃子方三名による餅つきセレモニーが行われ、その後卒業生による琴演奏、吟舞、太鼓、相撲甚句などのアトラクションが続き、県高等学校協会会長森茂氏の発声で万歳を三唱し午後三時に散会した。

4 記念講演会、記念招待野球大会

日を改めた一〇月二六日、午後一時三〇分より第一体育館において、笑福亭仁鶴氏を招いて「この世の中しんどくてもおもろう生きなあかんで」という演題で記念講演会が行われた。

記念招待野球大会は先だって八月二二日に、石川県立松任農業高校、福井県立坂井農業高等学校を招待して本校グラウンドで行われた。

5　記念事業

記念事業として記念会館の建設、記念庭園の造園、演習林案内標示板の設置が行われた。

記念会館は平成四年一一月四日に起工、平成五年六月末に完成した。鉄骨二階建、延面積四一六㎡。一階は研修室兼資料展示室で、農林学校時代の貴重な資料を始め、一〇〇年のあゆみを記す図書、写真等が展示保管されている。二階には広いベランダを持つ多目的ホールと和室が設けられ、眼下に記念庭園、正面には本館の偉容が望まれる。名称は広く募って農友会館「大地」と名づけられた。

記念庭園は直線と曲線が大胆な構成をみせるモダンな現代風庭園で、円形を直線が分かつ斬新なデザインの広場は野外活動のための語らいの広場である。この記念庭園は故東郷重氏（農林二〇回卒大正一一年本校助手）が東郷重三氏を通じ、本校の教育施設に役立たせる目的で県に寄附された五〇〇万円の財源を含めて実現したものである。

「大地に生きる」の碑は新たに巨大な御影石を両わきに配して新庭園入口に移された。これは第九代校長加藤竹雄氏（昭和二～二七）の功績をたたえ、創立八〇周年記念の折に卒業生有志により建てられたものである。また戦後の初代農友会会長故田保仁左衛門氏（農林一一回卒、戦前は学校長が農友会会長であった）の胸像も前庭から農友会館北側に移転した。胸像は昭和四二年一〇月に建てられたものである。

会館完成に際し豊田三郎氏（農林二七回卒）から「天到不屈」の一〇〇号油絵、水上三右ェ門氏（農林二七回卒）からは越前焼大壺他四点、湯淺満氏（農林四〇回卒）二〇号日本画『北潟湖畔』、柴田啓一氏（農高二回卒）一〇〇号油絵「不動（東尋坊）」、鈴木毅夫氏（農林三三回卒）系譜「歴代福井県議会議長」他一点、伊藤啓祐氏（旧職員）からは掛軸「神安気亦平」と額「大地」、辻千鶴子氏（旧職員）からちぎり絵など、それぞれ自作の芸術作品を寄贈していただいた。

また本校は大正三年広大な演習林を設置以来、営々と育林に努め、山林はみごとな美林に成長した。一〇〇周年記念に際し、本校生徒の八〇年余りにわたる労苦の結晶であることを示したいとして、演習林案内標示板が設置された（六呂師高原牧場事務所近辺）。同時に足羽山の継体天皇銅像周辺の松林も明治四二年本校の生徒達によって植林したものであることを示す植林記念碑が建てられた（足羽山福井市自然史博物館横広場）。

記念式典

場所　第一体育館

式　次　第

開会の辞……一〇時三〇分
国歌斉唱
物故者追悼
式辞
挨拶
祝辞……知事、県議会議長、国会議員代表、県教育委員会
来賓紹介
祝電披露
記念事業経過報告
永年勤続者表彰……三〇年以上、二〇年以上、一〇年以上。
感謝状贈呈
生徒喜びの言葉……生徒会代表
校歌斉唱
閉会の辞

七　創立一一〇周年の頃

バブルが崩壊し、学校を取り巻く環境が大きく変化していったのがこの一〇年である。

まず平成七年度から月二回の土曜日が休日となったが、更に平成一四年度から完全学校五日制となった。それに伴い教育課程が毎年小幅あるいは大幅に改編され、必修クラブという名称も姿を消した。

また、地域との交流が盛んとなり、ふれあい農園、ふれあいマートが相次いで開設され、地域の人々との交流もしっかりと根付いたものになった。

施設では、武道館の落成とともにグラウンド、プールの改修、第二教棟のリフレッシュ工事、第三教棟の耐震工事等、教育環境が一層整った。

修学旅行は平成六年度からそれまでのスキー体験学習に変わって北海道で、農業体験を取り入れたものに変更された。更に平成九年度からは各農家へ泊まって農業体験をするというファームステイが行われ、この形が今日まで続いている。

一方、部活動は演劇、陸上、新たに立ち上げられた郷土芸能、レスリング等が着実に成果を挙げている。また、男子バレー部が一五年の高体連の大会で準優勝するなど華々しい活躍を見せている。

さらに、制服については、平成一〇年に制服委員会が発足して論議を重ね、平成一二年度入学者から新しい制服に改定された。素材は環境に優しいということで使用済みペットボトルの再生生地が採用された。

国際交流に関しては何といってもインドネシア研修が始まったことが特筆に値する。第一回は平成七年夏、校長等二名の教員に引率され生徒八名が研修に参加、農業高校生との交流等意義深い体験となった。第五回の訪問時にはタンジュンサリ農業高校と友好協定書の調印を行った。それが縁で本校は、一五年度に入って二名のタンジュンサリ農業高校生（男子・女子各一名）を約二ヶ月間短期留学生として受け入れた。

インターンシップ制度が導入されたのは平成一二年度のことである。三年（学科によっては二年）になって各企業へ夏休み等を利用して実習に行き、職場体験をするものである。

パワーアップ事業は平成一三年度から始まり「ふれあいハーブ園」として整備され、三年目の一五年の農文祭のころ完成した。

平成一三、一四年度の二年間、学校安全研究推進事業の研究指定校となり、「心ゆたかに命はぐくむ安全教育」というテーマのもとに研究を行った。実習・生徒指導・庶務・保健部の教員、生徒会の四つの常任委員会（農業・ＨＲ・管理・保健）の活動が中心となった。

一方、本校は平成一一年度より福井県高等学校郷土芸能部の事務局となり、平成一五年度の全国高等学校総合文化祭郷土芸能部門の運営を担当した。

ＰＴＡ活動もめざましいものがある。農文祭ではそば打ち体験を行い、生徒・教職員・地域の人々の中にすっかり定着していった。それらの一連の活動が評価され、平成一四年度には福井県で初めて優良ＰＴＡとして文部科学大臣より表彰を受けた。

㈠　記念行事及び記念事業

１　記念行事

記念式典は一一月一日㈯、まず生徒・教職員有志で結成した一一〇周年合唱団による「大地讃頌」で幕を開け、午前一〇時、開会の辞、国歌斉唱に続き、学校長式辞、次いで実行委員長である福井県農友会会長山崎善弘氏、ＰＴＡ会長吉田英昭氏の挨拶、続いて福井県知事西

川一誠氏、福井県議会議長山本芳男氏の来賓祝辞、更に明治生まれの大先輩を代表して一〇〇歳の室谷保氏から祝辞をいただいた。それに続き、祝電披露、親子三代顕彰、感謝状贈呈の後、生徒を代表して生徒会長が喜びの言葉を述べ、厳粛なムードの漂う中、式典は滞りなく執り行われた。

式典に続いて第二体育館に会場を移し、杵つき餅、そば打ち会食が催され、午後からは邦楽部、郷土芸能部による祝賀演奏があり、その場の雰囲気を盛り上げた。続いて、中垣内祐一氏による「バレーボールと私」という題で記念講演が行われた。

その中で中垣内氏は、しっかりと目標を持って自分の人生設計をすること、現状認識・創意工夫をすることの重要性を説かれた。

記念式典　場所　第一体育館

式次第

開会の辞……一〇時
国歌斉唱
式　辞
挨　拶
来賓祝辞……知事、県議会議長
百歳祝辞
来賓紹介
祝電披露
親子三代顕彰
感謝状贈呈
生徒喜びの言葉……生徒会代表
校歌斉唱
閉式の辞

記念式典

記念植樹

2　記念事業

創立一一〇周年記念事業の一環として、一一月三日(月)、午前一〇時より来賓、農友会員、教職員・生徒等八〇名が九頭竜川・日野川の合流地堤防に集まり、記念植樹と記念碑の除幕を行った。

この事業は、平成一二年ごろに福井県農友会の元会長東郷重三氏の提案で進められ、まず地元の方々によって改修堤防に桜が植えられ、その続きに農友会が参加する形となった。しかし、敷地が足りない状態なので、当初の目標の一〇〇本植樹は達成できなかった。造成工事の進捗状況に合わせて植樹するという形でひとまず記念事業を終了した。また、本校の武道館裏にも二本の桜が植えられた。